

<書 評>

キャサリン・A・クラフト著，里中哲彦編訳

『朝から晩までつぶやく英語表現 200』

(筑摩書房，2021年，248頁)

軽 部 恵 子

本書は、キャサリン・A・クラフトの『英語表現』シリーズの最新刊である。2021年2月10日に第1刷が出版され、3月5日には第2刷が発行された。日本語話者に英語らしい表現をわかりやすく解説してきた著者に対する、読者の信頼の証と言えよう。

評者は、『日本人の9割が間違える英語表現 100』（2017年）、『日本人の9割が知らない英語の常識 181』（2018年）の書評を執筆した。1冊で取り上げる英語表現は100から181へと増え、今回で200に上った。

著者のクラフトは、アメリカのミシガン州に生まれ、オハイオ州で育った。オハイオ州のボウリング・グリーン州立大学（Bowling Green State University）で学び、南山大学に交換留学生として来日した。日本在住30年以上となる著者は、通訳、翻訳家、英語講師として活動するかたわら、オンラインマガジン『ET PEOPLE! Online magazine for EFL/ESL students』（<https://www.et-people.com>）を発行する。

クラフトの著書には、和製英語を取り上げた『こまったカタカナ英語：つうじる英語に大変身！』（中央公論新社，2013年）、ビジネスの場面で役立つ表現を集めた『仕事に効く！ずるい英語表現 100』（宝島社，2017年）、『日本人が勘違いしているカタカナ英語 120』（中央公論新社，2019年）などもある。まさに、「かゆいところに手が届く」内容となっている。

本書の構成は、「はじめに」, 「第1章 気持ち・感情」, 「第2章 自宅で」, 「第3章 家事」, 「第4章 街で」, 「第5章 会社で」, 「第6章 食事・レストラン」, 「第7章 ショッピング」, 「第8章 ドライブ」, 「第9章 天気」, 「第10章 体調・病気」, 「あとがき」となっている。一部の章の終わりにはコラムが掲載されている。それぞれのタイトルは, 「『行ってきます』と『ただいま』」, 「『ティッシュ』がない!?!」, 「『彼と同期です』を英語にすると」, 「『いただきます』と『ごちそうさま』」, 「『いらっしゃいませ』といわれたら」, 「『ペット』とおしゃべり」である。コラムのテーマは, 日本語にあって英語にない挨拶・概念, カタカナ英語を含み, 著者の英語教育者としての経験および過去の著作が存分に生かされている。

本書は英文法の解説は最小限に留め, ネイティブ・スピーカーが使う表現を紹介することを主眼に置いた。それは, 著者自身の経験に基づくものである。「(日本語の) 文法を習得し, 慣用句を暗記し, 単語を必死に覚えていきました。しかし, いざとなると, なかなか思うようにはいきません。」(「はじめに」, p.9)。そして, 心に浮かんだことを四六時中, 日本語でつぶやき始め, 「半年もしないうちに, そうした表現が会話のときにすぐさま口をついてでてくるようになったのです」(同, pp.9-10)。

各章の初めには, 場面を描いたイラストがあり, 表現がどのような状況で使われるか, イメージしやすくなっている。また, 類似表現を並べて解説することで, それぞれの語彙が持つ違いを明確にしている。たとえば, レストランで混雑しているとき, 単なる混雑はcrowdedだが, ぎっしりと人が入っているときはpackedを用いる (p.138)。

日本語でよく使うが, 英語の教科書ではあまり学ばない語彙も多く紹介されている。たとえば, 「(テーブルが) ぐらぐらする」(p.143), 「爪切り」(p.174), 「あいつ」(p.200) などである。コラムにある「同期」は, 年功序列意識の強い日本ならでは表現として, 先輩・後輩の言い方とともに, 状況を懇切丁寧に解説する必要性を説く (p.134)。たとえば, 「私よりずっと長くここにいる」, 「私の2年あとに入社した」などである(同)。評者は, 2021年

10月に中根千枝が逝去した報に接し、中根の最も有名な著作『タテ社会の人間関係』（講談社、1967）年を読み直したところなので、このコラムはたった1ページながら実に興味深かった。日本社会では、相手の年齢、経験、経歴、職階、自分との親疎の程度を総合的かつ瞬時に判断しながら、語彙や敬語を使い分けている。

本書に対する批判としては、第1章で紹介された感情表現である。最初の項目には、「ヤバっ！」に“*Oh, my God!*”を用いない方が敬虔なクリスチャンを不快にさせずに無難、と丁寧の説明されている（p.14）。しかし、2つあとの項目では、「ええっ！」に“*Man!*”が当てられている（p.16）。評者の経験に基づく、驚きの表現として女性は*man*をあまり使わない（個人の感覚に偏らないよう、インターネット上での質問と英会話講師の回答を検索し、それらも読んでみた）。近年は言葉がジェンダーレスになってきたのかもしれないが、アメリカで女性がこの語を使うと、相手によっては驚かれるかもしれない。日本語で「すごい」を「スゲー」というような感覚である。「スゴッ」なら、ごくカジュアルな状況で女性も使うだろうが、「スゲー」の場合、女性に限らず男性であっても、上司や重要な顧客が居る場で使わないのではないか。本書の例文にある“*Man! This is my lucky day!*”（よし！きょうはツイてる！）は話者が男性と思える訳だが、“*Man! That's cool!*”（うわっ！かっこいい！）と、“*Man! I'm tired!*”（もお！へとへとだよ！）は、話者が女性のように聞こえる。

それから、「むかつくなあ」（*That stinks.*）は、「フォーマルな場で使うのは避けた方が無難である」と説明されている（p.31）が、友人同士の会話であっても、かなり強い語句かもしれない。そういえば、フィンランドの作家トーベ・ヤンソンの『ムーミン』シリーズに、「スティンキー」（*Stinky*）という生き物が出てくる。この生き物は、見た目と性格もさることながら、卵が腐ったような強烈な臭いを発しているという設定である。

この種の表現を集めた章は、読者が意気込んで読む第1章ではなく、後ろの方に置いた方がよかったのではないか。最後まで読み通した読者なら、そ

それぞれの表現を使う状況を間違えないであろう。

評者としては、感情表現に便利なupsetをぜひ単独の項目で紹介してほしいと思った。日本語の「怒る」は、子どもを教育するために叱る時、デートの時間に大幅に遅れてきた恋人や、誕生日・結婚記念日等を忘れた配偶者に頭にきた時など、様々な場面で使われる。しかし、恋人や配偶者に対し、ちょっとした過ちで“I am angry.”と言うと、「逆ギレ」されるかもしれない。それぐらいangryは強い語句である。ちなみに、英語圏では、恋人や配偶者が相手を問い詰める前に、“We need to talk.”の文で話し始めることが多い（話し合いが成立せず、すぐに派手な怒鳴り合いになるかもしれないが）。一方、upsetは、「ちょっと頭にきた」「むかついた」時から、お腹が痛い時（とくに下痢気味の時に便利である）、病院で再検査と言われ動揺した時から、スポーツの試合の番狂わせ（上位シードのチームがシードのないチームに敗退した）まで、応用範囲が広い語句である。

それでも、本書は、より自然な英語表現を身につけ、多様性の時代に友人や同僚とコミュニケーションする上で大いに役立つであろう。タイトルが「英語表現 200」だが、200を多いと感じない。楽しく学べること、請け合いである。

(かるべ・けいこ／法学部教授／2021年12月20日受理)